

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる派遣
帰国報告

提出日 2012年8月28日

1. 基本情報

氏名：中島立博

所属研究室：哲学研究室

学年：修士課程2年（平成24年度時点）

派遣形態：個人派遣

2. 研究課題名

プラトンにおける哲学的問答法と政治哲学

3. 派遣先での活動

(1)派遣先の基本情報

国名：イングランド

都市名：オックスフォード

研究機関名：オックスフォード大学クライスト・チャーチ

コンタクトした主な研究者名：ロバート・パーカー教授、ピーター・パーソンズ教授、マーティン・ギュンター博士

(2)派遣期間

2012年8月3日出発、同年8月20日帰国

総日数：17日

4. 主な研究成果

(1)当初の計画の概要

当初の計画の概要は次の三点である。(1)国際学会「プラトンにおける国家と自由」への参加し、プラトンの政治哲学研究の現在を探る。(2)古典学者（ロバート・パーカー、ピーター・パーソンズ、ギュンター・マーティン）のレクチャーへの参加し、自らの専門である古代哲学に留ることなく、西洋古典学全般

に関する知見を吸収する。(3)ボードリアン図書館での文献調査を行い、日本ではアクセス困難な古代哲学に関する研究文献を調査する。

(2)実際に達成された成果

(1)の国際学会への参加によって、「自由」という主題を中心として、プラトンに留まらずストア派・教父哲学に至まで幅広く理解を得ることができた。(2)の西洋古典学全般に関するレクチャーへの参加に関しては、西洋古典学に関連した歴史学・宗教学・パピュロロジー・文学の知見を深めることに成功した。特に、マーティン・ギュンター氏が行った歴史学の知見を応用した文学的文献の読解に関するレクチャーでは、西洋古典学における学際的研究の手法の一端に触れることができた。(3)のボードリアン図書館での文献調査に関しては、古代哲学に関する文献のうち最新のものから20世紀初頭のものまで、日本ではアクセスすることが困難な文献を多数調査することに成功した。特に L. Brisson の論文（‘The relations between the interpretation of a dialogue and its formal structure. The example of the *Theaetetus*’）から多くの示唆を得た。この論文はプラトン研究の手法として、従来の分析哲学によるアプローチの問題点を鋭く指摘し、かわって対話形式に着目した読解を主張し、新たなプラトン解釈の方法を提示している。

(3)今後の展望

(1)～(2)で得られた知見を修士論文に反映させる。(3)ボードリアン図書館で収集した文献に関してはまだ未読のものもあるため、綿密な調査を継続しつつ、修士論文に反映させる。特に、上述した Brisson の論文は、筆者が研究課題として定めている哲学的問答法の内実を解明するために重要な示唆を与える。しかし同時に、解釈の問題のみに留まっているため、今後の研究ではその点を発展させつつ、解釈の方法をプラトン哲学の内実を解明するために応用することを目指す。